

世代超え手から手へ

とちぎ 戦後70年

悲劇の記憶

生き残った者の責任と
して慰霊碑を守り続け
る。

連隊約1200人の大
半が玉砕したアンガウル
島戦で左半身に重傷を負
い、参戦できなくなった。



篠原直人さん

陸軍宇都宮第14師団が
終戦を迎えた南方の島国
パラオ。日米の激戦地だ。
幼少期を那須で過ごし
た倉田洋二さん(87)は
南洋庁職員として10代半
ばでパラオに渡った。

「仲間が次々と倒れてい
るのに」と無力感にさ
いなまれた。捕虜として
敵兵の手にも落ちた。
仲間たちに負い目を感じ

退職後の96年、2度目の
パラオ移住へと駆り立て
られた。
現地の開発に伴い、慰
霊碑20基余りが撤去され
かねなかった。資金集め
に奔走し、移転を実現さ
せた。

この年末年始は、病氣
療養のため東京の自宅で
過ごす。年明け、パラオ
に戻り、台風で壊れた慰
霊碑の修復に力を注ぐつ
もりだ。

戦況が悪化した194
4年、現地召集され、第
14師団配下の連隊に組み



倉田洋二さん

宇都宮市西川町、自
営業篠原直人さん(31)
は、パラオの戦跡調査に
取り組んでいる。
第14師団などに関心を
持ち5年前、パラオの倉
田さんの元へ押し掛け
た。
初めは困惑した倉田さ
んが、ゼロ戦の残骸を
歩いて探す粘り強さ、こ
れまで8回も足を運ぶ熱

戦跡、空襲ともに伝える

心さに目を見張った。
50歳以上の年齢差を超
え、「思いを継いでくれ
る不言実行の青年」。

篠原さんは現地住民や
兵士遺族への聞き取りも
する。不時着したゼロ戦
のパイロットの身元を68
年ぶりに突き止め、遺族
を慰霊の旅に導いたこと
もある。

「主義主張を超えて歴
史に学ぶことが戦禍を繰
り返さないために重要」
一人一人の兵士の生き
ざまを記録として残す作
業に情熱を傾けている。

15年前から、そうした体
験を紙芝居にまとめ小学
校で子どもに伝えている。
「語り継いだ相手がさ
らに誰かに語り継ぐ。そ
うでなければ本当に語り
継いだことにはならない」
紙芝居で伝える役割を初
めて、地元を読み聞かせ
ボランティアに委ねた。

宇都宮大空襲でも「継
承」が始まっている。

受け継ぐ活動の中心
となった豊郷地区地域
市鶴田町、大野幹夫さん
教育協議会委員の大金
(82)の住まいはそのこ
ろ、市中心部にあった。

者のお話を聞
いた子ども
が自ら考
え、また当
事者となり
たりする。
「そんな仕
組みができ
ないか」。

継承への模
索だ。



大野幹夫さんと大金美知子さん

継承への模
索だ。

プロローグ 5
戦争体験をお寄せください
TEL 028-6225-1121
FAX 028-6221-4414
E-MAIL sengot@shimotake.co.jp